



教職員支援グループ（教育情報）

現職教育【情報教育サポート】より

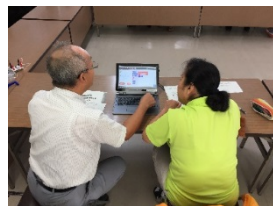
夏休みなどを利用して、多くの学校で「情報教育サポート」の現職教育が行われました。今回は、行われた5種類の講座の主な内容と受講者の感想を紹介します。

1、プログラミング教育入門講座

【内容】2020年度から必修化されるプログラミング教育について、そのねらいや方向性を知り、体験を通して指導の具体を学ぶ。

【受講者の感想】

- ・講話と体験を通して、プログラミング教育のイメージがつかめた。プログラミング技術を教えることはとてもできそうもないが、プログラミング的思考を育てると考えれば、各教科で少しずつ取り入れていけるような気がした。
- ・今回の授業なら子どもも試行錯誤しながら取り組んでいけそうである。また、子どもたちが頭を使いながら楽しく取り組んでいる姿も目に浮かんだ。
- ・自分が指導することを考えると、どんな場面で活用するか、評価はどうするかというところを考えていきたい。



2、「SKY MENU」活用講座

【内容】タブレット端末を効果的に活用できるソフトウェア「SKY MENU」の活用方法を学ぶ。

【受講者の感想】

- ・SKY MENUは様々な機能があり、使いやすいと感じた。自分が面白い、楽しいと感じたので2学期から積極的に使っていきたい。
- ・いつも利用している機能の他にたくさんの便利な機能を知り、活用してみたいと思った。特にファイルの配付、回収については授業の効率がよくなると感じたのでぜひ使っていきたい。

3、「eライブラリ」活用講座

【内容】教科書に準じたプリント作成やタブレットを使ったドリル学習ができるソフトウェア「eライブラリ」の活用方法を学ぶ。

【受講者の感想】

- ・教材の資料や動画はとても便利でぜひ使いこなしてみたいと思った。全国の高校入試の過去問や資料なども豊富で著作権クリアされており、テストづくりにとっても役立つと思った。



4、「情報モラル」指導講座

【内容】子どもたちを取り巻く情報モラルに関する課題を知り、模擬授業を通して情報モラル指導の在り方を学ぶ。

【受講者の感想】

- ・携帯所持率など自校の実態を把握したり、動画視聴で、生徒が実際に巻き込まれそうなトラブルについて考えたりすることができ、指導の方向性を見いだすことができた。トラブルを未然に防ぐためにも、このような授業を取り入れていきたい。

5、らくらく校務支援システムサポート

【内容】効率よく校務を行うためのソフト「らくらく校務支援」の使い方を学ぶ。

【受講者の感想】

- ・前年度まで大垣市以外の学校の勤務だったので、どのように成績処理を行うかととても不安だったが、今日の講習を受けて不安が少なくなった。

教育情報センターでは、研修を通して、先生方が「これは使ってみよう！」と感じてもらえることを願っています。今後も先生方のICT機器の活用をサポートしていきます。使用の際にお困りなことやご相談などあれば、(TEL75-7020)までご連絡ください。

児童生徒支援グループ (少年支援)

仲間の存在に気付かせ、 自己肯定感・自己有用感を高める！

2学期が始まり、運動会（体育大会）、前期の締めくくり活動など、多忙な学校生活が続いています。この前期の締めくくりから後期のスタートという節目に、自己肯定感・自己有用感を高めるために大切にしたいことがあります。

① 自己肯定感を高める

ある中学校の体育大会の朝練習で、相談室の生徒が見学をしていました。その生徒は学級の仲間と一緒に練習しませんでした。はちまきをして体操服に着替え、仲間が練習する姿を見学していました。体育大会への参加の仕方を聞くと、「係の仕事を頑張ります」と答えました。「自分で決めたことをやりとげたい」という気持ちを感じさせるきっぱりとした口調でした。

また、その相談室の生徒は「私は一人じゃないので・・・」とつぶやきました。

運動会や体育大会は前期の大きな節目となる行事です。しかし、児童生徒の中には、運動が苦手な人前で運動することが恥ずかしかったり、仲間と一緒に運動して迷惑をかけないか不安だったりする子が少なくありません。

それをどのように乗り越えたか、児童生徒と共に振り返って明確にし、自信をつけて後期につなげていくことが大切です。

上記の相談室の生徒のつぶやきは、「仲間の存在を支えにして頑張る自分」に気づかせたからこそ出た言葉です。

② 自己有用感を高める

ある中学校の体育大会で、救護テントから動こうとしない生徒（A）がいました。たくさんの仲間や先生が、Aに「一緒に行こう」と声をかけては立ち去りました。さらに、担任の先生が寄り添って説得しました。

その間ずっとそばで寄り添う生徒（B）がいました。Bは心配そうな表情で、何も言わずにAを見つめていました。Bは、時間ぎりぎりになって、後ろ髪を引かれながら立ち去りました。

Bは「Aを動かすことができなかつた」ことは悲しいでしょう。Aは「Bの気持ちに応えられなかつた」ことを後悔するでしょう。

しかし、今後、Bの「Aを大切に思うあたたかい心」をAに伝えたり、B自身に自覚させたりすることはできます。Aは「自分が仲間から必要とされている」ことに気づき、Bは自分の心の中に

「仲間を大切に思う気持ち」があることに自信をつけます。

児童生徒の仲間に対する行動を起こした気持ちを、児童生徒と共に深く掘り下げたり、気づかせたりすることで自己有用感を高め、後期につなげたいものです。

子どもの「折れない心」を育てる！

厚生労働省は、「平成28年における死因順位別にみた年齢階級・性別死亡数・死亡率・構成割合」に「10～14歳の死因第2位は自殺（16.1%）」と示しました。また、9月10日～16日までは「自殺予防週間（厚生労働省：自殺について誤解や偏見をなくし、正しい知識を普及啓発する期間）」でした。「自殺予防」は喫緊の課題です。

今、子どもにとって「折れない心」をもつことの重要性が高まっています。それは、ストレスによる心身の不調を訴える子どもが増えているからです。主なストレス源としては「友だち関係」があります。子どもは、学級、部活動、習い事などの集団の中で、自分の立ち位置を非常に気にしているのです。

一方、子どもとかかわる大人も多くのストレスを抱えています。特に教員のストレスレベルは深刻で、公立学校では毎年約5千人の教員が精神疾患を理由に休職しています。

そこで、折れない心を育てる「レジリエンス教育」に注目が集まっています。

レジリエンスとは、逆境や困難、強いストレスに直面した時に、適応する精神力と心理的プロセスである。（全米心理学会）

- ① 失敗しても気持ちが落ち込んでも、すぐに立ち直ることができる回復力
- ② ストレスやプレッシャーをしなやかに受け止める柔軟性
- ③ 変化が多く、不確定な状況でも対応できる適応力

以上の3点を備えているのが「レジリエンスの高い人」の特徴です。

レジリエンスの力の中には、「ソーシャルサポート（信頼できる人、助けになってくれる人）」があります。人は、自分が誰かから理解され、大切にされる経験によって愛情を感じられると、安心感が芽生え、満たされた気持ちになって、挑戦したり逆境に立ち向かったりすることができるようになります。

子どもも大人もストレスを一人で抱え込まず、心の支えとなる人とかかわりを大切にして、「折れない心」を育てたいものです。

<参考：子どもの「逆境に負けない心」を育てる本
足立啓美・鈴木水季・久世浩司 共著>

「教育総合研究所にかかわる10・11月の行事」
10月2日（火）人権・同和教育幹部研修会
4日（木）第2回大垣市少年支援員研修会
15日（月）第2回研究部長会

10月22日（月）第3回教科別研究会（小中合同）
11月16日（金）第5回教育相談研修会
21日（水）第2回各種研